
パパン、私は幸せです

秋月 実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パパン、私は幸せです

【Nコード】

N6286Y

【作者名】

秋月 実

【あらすじ】

拝啓、天国のパパン。

私は今日も幸せです。それもこれも全て、パパンが私の記憶と人格と頭脳の価値を認めてくれたお陰です。チートとは縁がないし、貧しいけれど平和な毎日を、日々妄想を楽しみながらその日暮らししています。男に産まれた当初は戸惑いましたが、それも最近ではすっかり慣れました。繰り返しますが、私は幸せです。

え、何降りてきてんの。チートいらないうって言ったでしょ。私はこれでいいの！ 結婚！？ ハーレム！？ ふざけんなああああ！

!

プロローグ 前編 チートなんていらないうつ

気がつくと、真っ白な所に立っていた。

大勢人が集まっている。ちょうどその中心ほどに私はいた。

声が、聞こえてくる。

そちらを向くと、天使様が羽ばたいていた。集団の右のほうには様々な服装をした天使や悪魔、エルフたんや獣人、ドワーフっぽい人が並んでいる。

「ええと、皆さんこんにち。貴方達は、私共の子供となること、つまりこの世界に転生する事になりました。より多くの子供達が幸せになれるよう、この世界では皆さんに転生の際の希望を聞いています。よく注意して聞いてくださいねー」

ええええええ！！　転生！？　すごい！　ありえない！　そっ
か、私、死んだんだ。そういえば、最近だるかった気がする。そっ
かぁー。ああ、でも死んじゃったのか……。

まあ。チート転生できるんだからいいよね

「まず、皆さんに紙を配ります。上から順に、次の生での第一希望の望み、第二希望の望み、第三希望の望みを書く事ができます。頭の中で第一希望は可愛くなりたいたい、とか、第二希望は頭が良くなりたいたいって考えればそれで紙に文字が浮かんできます。では、注意点を述べていきます」

私の手に紙が握られる。真っ白な紙に、私の名前が書かれていた。

「いいですか。まず、願いは第一希望から順に叶えられていきます。次に、同じ事書いても、第二希望の方が遥かに強いです。例

えば、一般的な人が剣の技能を望み、努力したとします。すると、第一希望に書けば一流、第二希望に書けば少し上手い程度、第三希望に書けば普通の腕前が保証されます。こういう人になりたいというだけでなく、例えば、美しくなくてもいいやとか、貴族や王族にするぐらいだったら他の才能や健康が欲しいという人は、貴族や王族は除くと書くと、地位よりも才能に恵まれやすくなります」

第一希望ぶつちぎりで凄いな。魔法使いたい。

「転生の手順ですが、まず前世での行いをポイント化し、基礎値プラスランダムでポイントを追加します。ここから、願いをその人の向き不向きなどを加味して叶え、願いの分のポイントを引いて、あるいは足して行きます。残ったポイントを0になるまで生まれや才能、美しさや健康に振り分けて生まれてもらいます。また、それぞれに課せられた課題を達成すればご褒美がもらえますよ」

なるほど。

「紙を持って右の人達の所に行くと、一度だけアドバイスが貰えます。叶えられない願いがあればその時教えてもらえますが、二回目には叶えられない願いがあってもそのまま受理されます。貰えるアドバイスは、専門分野によって変わってきますが、みなさんの幸せを願うことに関しては変わらなないので安心して下さい。最終提出を行った担当者が来世の貴方の担当者、すなわち親となります。それと、転生すればここでの記憶は忘れてしまうので、相談を恥ずかしながらする必要はないですよ。最後に、左方向にいけばこの世界についての資料が見ることができるので、初めてこの世界に生まれる人は見ておくのもいいでしょう。これで説明は終わりです。親として、貴方達の幸せを心から祈ります」

ぺこりと天使が頭を下げ、大多数の人々ががやがやと喋りながら並んでいった。

私はそれについていき、様子を見る。人のアドバイスというのを聞いてみたい。

天使はやはり人気だった。私はそちらにより、おじいさんと天使が話しているのを聞いてみる。

「第一希望の研究を完成させる、という願いは不許可です。なぜなら、それは才能ではなく、その人の行動になるからです。記憶を保持する、もしくはそれを可能とするほどの頭脳を授けることは可能です。でも、この研究は素晴らしいものです。その知識の保持となると、かなりのポイントを消費します。例えば、魔力もそれを理解する知能もない農民に生まれてしまえば、研究も無用の長物となってしまう。そもそも、それは貴方の記憶を持っても、別人なのです。貴方は大変高いポイントを持っていますが、記憶と環境と頭脳の三点をクリアするのは不可能です。それをどうするかよく考えて、もう一度持ってきてください。ただ、貴方の魂は学者として適正があるので、頭を良くする願いは比較的叶えやすく、生まれ変わってもその道を選びやすい傾向を持っていますよ」

「どうするか……」

おお、かなり細かく見てもらえるんだ。凄い。

「王様と正妃の子、美形、そして長男ですか……その場合それだけでほとんど全てのポイントを使いますが」

「うるせえ、言う事を聞け！」

ええ……。それってありなの？

この世界の王侯貴族はきつとろくなもんじゃねえな。

生まれがいいほど、消費ポイントが高いわけだし。

それから、しばらく聞いて回った後に、考えを纏めながら左へと向かった。

前世の記憶、それも価値ある記憶は高いらしい。それに、頭の良さもセットで貰わないと意味が無いようだ。人格も必要、と。

私は、考える。

記憶、人格、頭脳。

現状維持だけで終わるじゃん。

そして、考える。

私の記憶と人格と頭脳はいかほどのものだろうか？

いや、願いを変えるつもりはないんだけどさ。

資料をパラパラとめくる。

いろんな種族があるんだ。

へー、魔物もいるのか。

文明はあまり進んでないなー。

魔法がある。

大雑把に書いてあるそれをじっくりと読み、ぱたんと閉じた。

とても素敵だと思う。具体的に言うと、私が嵌っていたバーチャ

ルリアリティゲーム、MMOと同じくらい素敵な世界だ。

ただ、ネットがないんだよね……。本もあんまりなさそう。何それ地獄？

しばし考える。

まず、内政チートは出来るだろう。少なくとも領主として大成できるはずだ。

となると、その知識の価値はいかほどか。

きつとものすごく高いに違いない。

次に、性格。これも高額だろう。凄く人格者だとは言わないが、まあまあいい性格だと思うし、犯罪者というわけではないし。

さらに、頭。これは記憶と表裏一体だが、この素晴らしすぎる頭

脳は高かるう。

現代人の中ではそりゃ悪いほうだが、行くのは中世ファンタジーですよ？

これは貧しい生まれ確定か……。

どころか、もしかして不可と言われるかもしれない。

高いポイント持つてるじー様がダメだしされてたもんな……。

中世レベルの発明でダメ出しされるんだから、そうとう記憶は高いに違いない。

私は重い足取りで、イケメンで空いてるという理由で悪魔の……いや、悪魔様の方へと向かった。

「すみません、お願いします」

「ん、担当官のルヴァキルだ。二回目も持ってきたら、俺がお前の父って事だな。じゃあ、見せてみる」

パパンはそれに目を滑らせ、整った顔を顰めた。

「……んー……これは……ずいぶん思い切ったな。どうしたもんか……」

「え、と。生まれは悪くて構いません。醜くてもいいです。男でもいいです！　お願いしますパパン！」

「そりゃ無理だ」

パパンの拒絶に、私は絶望する。

「そんな！」

「つーか、そんなに大量にポイント稼いで何がしたいんだ？ 剣士にでもなりたいのか？ これだけポイントがあつたら、確かに世界一の剣士になれるが……。多分第一希望に剣士って書いたほうが早いぞ。第一希望に剣士とだけ書いておけば、俺がいいようにしてやる」

「どこから剣士が。嫌ですそんなの。え、っていかもしかして私ってポイント高い？ 前世の行いとかランダムとか相当いい結果が？」

「前世問題外、魂高め、ランダム普通だな。結果普通より少し下かだからって何も記憶を引き継いでまでポイント稼ごうとする必要はないぜ。完全に俺に任せるなら、そこそこ幸せな約束を確約できると思う」

「前世問題外ってひどいよ！ 親切に辻ヒールしたじゃない！ 良い事いっぱいしたのに！」

「それは善行じゃねえ」

「えー。でも、いろいろ我慢すれば記憶と人格と頭の良さはそのままにして貰えるんですね？」

「ん？ ちょっと待て。何か勘違いしてないか？」

「パパンは信じがたい表情で、私を見る。」

「えっと。お前の記憶、人格、頭脳。全部ぶつちぎりでマイナス要素なの理解してる？」

「そんな馬鹿な」

パパンは難しい顔で書類をめくった。

「まず、記憶。小学校の頃から漫画、ゲーム、アニメ、ネットに入り浸り、高校時代にバーチャルリアリティゲームが開発されてから、引きこもってそれで遊び続ける。役立つ知識はなし」

「なんで！ VRMMOで鍛冶屋も裁縫も錬金術も医療も武術も極めまくった凄まじい宝庫じゃない！」

「あのな。ごっこ遊びと本物は違うんだ。ゲームでできたから現実でも出来るとかないから。どれも現実では通用しない。それに、恵まれた生活を知っていると辛いぞ。例えばこの世界にはネットも漫画も存在しない。言葉だって、大人が覚えるのと赤子が覚えるのじやわけがちがう。そんなわけでかなりのマイナス」

「えええええ！？」

「次、人格。二次元にのみ欲情し、腐女子。働いたら負けだと思ってる。コミュニケーション障害。この性格で生きて行けるほどこの世界は甘くない。かなりのマイナス」

「人格否定！？」

「頭。こっちの七才程度の知能で固定とかとんでもない。生きていくのも難しいだろうな。これだと魔術の行使も無理。当然マイナス」

「うげらっ！」

私は打ちのめされて机に突つ伏す。

「悪い事は言わない。この3つの願いは全て取り消せ。俺達は、子供達に幸せになってほしいと思ってる。その為には、この3つは邪魔なんだ。お前は一度死に、新しい赤子が産まれる。その子に、出来る限りの幸せを与えたいと思わないか？」

「記憶のない来世なんて他人じゃん！ どうでもいいYO！ お願い、パパン！ ポイントが何に付きいくつなのか知らないけど、3つの願い全部で三十ポイントぐらいに換算してよ！ マイナスとか酷いよ！」

「おまけにおまけしてマイナス三万ポイントだな。これ以上無理」

「マイナスすごっ！？ そこをなんとか！ ポイント増やせって言ってるんじゃないんだしさあ！ 三ポイントでもいいから！」

「うーん、マイナス一万五千までなら、なんとか」

「プラス以外認めないYO！ くそ意地でも今のままの頭脳で生まれてやる！」

パパンはため息を付く。

「いいか、俺達にはお前に努力次第で幸せになるチャンスを与える義務がある。なにより幸せになってほしい。これだけ大きなマイナス、どこかで挽回しないと幸せになてなれっこないだろ？ 最低でも一万五千点分のテコ入れは必要だ」

「十分幸せになれるYO！ 幸せって誰の基準！？」

「俺の基準。学んで働いて子供作って育てる幸せ以外認めない！
したがって豪商の家で食っちゃ寝系のポイントの割り振り方も認め
ない！ ニートの幸せなんぞゴミ箱に捨ててしまえ！ 俺が人に誇
れる人間になれ！」

「地獄やアアアアアア！」

その後も土下座して願いの受理と三ポイント認定を願っていると、
他の人は全て転生し、私だけになっていた。

なんだなんだと担当官が寄ってくる。

うつ、晒し者のヨカーン。

プロローグ 後編 納得の駄目さ

「まあ、ルヴァキル。だめよ、頭ごなしの否定は。私にいいアイデアがあるわ。まず、記憶、人格はそのままにしましょう。頭の良さもそのままに。三ポイントで換算すると、性別を男にすれば、生まれを少し貧しく、外見を並に、健康な子供として生まれられるわ」

天使がおつとりと紙を見て告げる。

「しかし！」

「けれど」

天使は一本指を立てる。

「貴方には、貴方の前世を正当な評価した分の高い魔力と隠蔽能力を授けます。これを使うも使わないも貴方の自由。……という事でどうかしら」

「あ、ありがとうございます！」

「待ちなさい。いくら殺人鬼ではないとはいえ、能力のない子に高い魔力を預けて野放しにするということですか？ それはあんまりです。王の座程度ならいくらでも革命できますが、魔力の場合は暴走した時、止められる者がいなくなってしまうです」

即エルフがダメ出し。つーか、王の座あっさり許可したのってそんな意図があったのね。怖いわー！

「何か他に意図して選択できる力を渡せば良からう。そうすれば、世界ぶつちぎりで一位の魔力も一流程度に調節できる」

そんなに私の前世、マイナス酷いんか！？ 私悪いことしてないじゃん！ あ、ごめんなさい、PK（ゲーム内で他プレイヤーのキアラを攻撃）したことはあります。

「その場合目標も、二種類決めないと駄目だな。前者なら働け、後者なら人の役に立て、かな……」

「両方共、少し難しすぎるのではないでしょうか」

酷い言われようです。

「私働いてたもん！ VRMMO内で一所懸命冒険者やったもん！」

その訴えはスルーされた。ひ、ひどい。酷過ぎる！

「よろしい。久々に全員でじっくり話しあいましょう。ミネルバ様にも許可を取らねば」

「大会議か。勇者が普通の家庭に生まれたいと言った日以来だな……。しかし、それも仕方あるまい」

何か大事キター。

「わ、私、ちょっとお前の前世に価値はあるって認めて欲しいだけなのに……」

丸くなつて泣き出した私に、優しく担当官達は微笑む。

「私たちは、皆、貴方の幸せを望んでいます。大丈夫、ルヴァキルを……貴方のパパンを信じなさい」

「ああ、必ずまっとうな人間にしてやる」

パパンが言う。うう、まったくもって必要無いです……。そして、私の体は透けていった。

結果発表――！ ドンドンパフパフ。

まず、私の名はルグナ。立派な男の子である。健康だけど、力がさほど強いわけではない。その代わり器用である。加護付きなので器用さは割と凄い。

ちよつと小柄。顔は並。

次に、私の家庭。

私のママン、フィアは未婚であり、貴族にはほんくらが多い。以上。ちなみに援助はなく、女手一つで私を育てた。

加護について説明しよう。

ママンは私がお手伝いをした事がなくとも、勉強をせずとも、愛情を注いで決して何も言わなかった。7歳の頃。そんな母が病気に

なった。よろめきながらも、いつものようにご飯を作ってくれようとするママン。だらだら寝っ転がっていた私は、なにか凄く悪い事をしたような気になって、食事を作るのを手伝った。

母は泣いて喜んでくれた。

パパンも泣いて喜んでくれた。天界からわざわざ夢の中まで出張してくるほど喜んでくれて、とても立派な加護……器用さをくれた。目標、働くをクリアしたことによるご褒美だ。

あんまり喜ばれるんで、私は逆ギレした。

「バカにすんな！ 私だって手伝いの一つや二つ出来るわ！」

それ以来、たまに母を手伝っている。何か騙された気がしないでもない。面倒な洗い物中は特にそう思う。

いや、たぶん絶対騙されてる。

なんで私、洗い物なんてしてるんだろう。

おのれパパン。我が父ながら、恐ろしい男。

そんな事を思いながら、洗い物を拭いて運ぶ。ママンはニコニコしながらそれを眺める。もちろん、手はせつせと内職をしている。

さて、次に私には存在しない能力である。

存在しないつたらしいのである。

其の一。魔力隠蔽能力。

其の二。超一流クラスの魔力。

其の参。パパン召喚（5回まで）

其の四。脳内パソコン。（魔力の簡単な基礎制御ソフトと剣士ソフト、基礎魔術リスト付き。基礎制御は抑える方向で常時発動。他に診断ソフト、植物辞典なども）

其の伍。亜空間物入れ。

其の六。お告げ（神様名義で私の保護を申請してもらえらしい）
其の七。パパンアドバイス（無制限）

……。貰いすぎじゃね？ 魔力隠蔽能力はいいよ？ けど、「超一流」クラスの魔力って何？ パパン召喚って超すごいことじゃね？

パパン悪魔の格好しているけど、その実態は神様だよな？ 脳内パソコン、ええ、魔力を操るには必要だと思います。基礎制御も、暴走を防ぐには必要です。ありがとうございます。でもさ。

剣士ソフトとか、基礎魔術リストとか、診断ソフト、植物辞典はやりすぎじゃね？

確認しかしてないけど、剣士兼魔術師兼医者にすぐ慣れるってありえなくね？

「亜空間物入れ？ それってかなり高度な魔術じゃなかった？
 つーか神様名義で私の保護を命じられるってどういう事！？

パパンのアドバイスいらない！！

ねーよ！

そこまでしないと幸せにならない私の前世って何！？

どこまで人を見下せば気がすむんだよ！

「つか、パパン達は何を望んでいるの!? 馬鹿に刃物をもたせる
なっ て遠まわしに言っ てたじゃない! 十分すぎる人間兵器ですが
なにか! ?」

くっそ、自分のプライドがかかってなければ俺TUEEEESH
てやるのに！

ぜってー使ってやらねー！

私の前世を私が認めなくて、誰が認めるっていうんだ。

ママンが病気の時とか、超使いたくなるのがまた悔しい。

元から無いはずのものを使わないだけなのに、私が悪者みたいじゃない！

こんな能力、無ければ良かった。最悪だ！

プリプリしつつも、実はチート能力、使ってしまったんだよね。

其の七、パパンのアドバイス。

呼んでないのに来るの。来るの！ お祝いごとや誕生日やお正月

など、しょっちゅう来るの！

チート使うことになるからパパン来んなよ！　って言ってるんだけど全く聞き届けてくれる様子がない。

パパンに励まされ、叱られている事が物凄く嬉しいことが、またチートを活用しているみたいで腹が立つ。

……実は、言葉を碌に覚えられなくて、同年代の子供にバカにされてばっかで、それもあつて友達とか全然作る気にならなくて、でもたまに寂しくて、ネットとか出来ないのが辛くて、そんな時に物凄く助けになってくれたりする。

ああもう、信じられない！

私、幸せになるから。

今の記憶と人格と知恵で、絶対幸せになるから！

くそう、ゲームのアイテムの名前と効果ならするする記憶できるのに、日常の単語は全然覚えられないんだよなあ。ちよつとお母さんの内職手伝いながら、しりとりでお勉強でもするか……。

……私がお勉強なんて。最悪だ……。

一話 結婚しても子作りの予定はないですよ

えいやああああ！ とおおおおお！！

私は布に気合を入れて針をぶっさす。

私の最近の日課は刺繍をして売っ払うことである。

ふふふ、絵心はあるんだ、絵心は。

私、生活していけるんじゃない？ ただ問題は刺繍で生活している男を見た事がないということなんだけど。私が新しい道を開拓してやるぜええええ！

そんなある日の事である。

一組の父子が隣の家にやってきた。

ローブに仮面姿の糞怪しい女の子と、人の良さそうなお父さん。なんでも、醜いからローブと仮面で隠してる的なうんたらかんたら。

そして、仮面にロマンを感じるのがこの私である。

ママンに隠れ、じっと観察する。

しかし、コヤツ残念だ。ローブが白の無地というのが行けない。私だったら、かなり怪しい刺繍を施して悪の人物っぽくしてやるのに。

系代たくさん掛かるからしないけど。

ちなみにこの女の子、帯剣してます。それもあって怪しさ天元突破。

「あの。僕はリーファです。13歳です。よろしく」

「私はルグナ。8歳よ。よろしく。剣使うの？」

「嗜み程度です。ルグナは？」

「私は刺繍が出来るわ」

そして、しばし私は考える。

この私の素晴らしい過去を活用するなら、剣を習う事は必須じゃね？

剣の扱いなら自信あるYO！ なにせ（ゲームの中で）凄腕冒険者だったからね。

「剣、教えてくれる？ 代わりに刺繍を教えてもいいよ！」

「いいんですか？ ありがとうございます」

微笑ましく笑う両親に見送られ、果物をもたせられて、私達は部屋を出た。

私は取って置き場所……ちょっと人に見つかりづらい小さな広場に案内する。

ここは木々で覆われており、しかも町の中の緑なので危険はない。私とリーファは木の棒を構え、対峙した。

まず、私が動く。ていやああああ！

な、何！？ VRMMOの時と体の使い勝手が違う！？

ジャンプ力が全くでない！？

棒の遠心力が！？

システム補正がない！？

結論から言おう。

あっという間に叩きのめされた。

おのれええええ。VRMMO内なら負けないのに！

リーファはじつと私を見る。

「……ルグナ。君、前世の記憶って信じる？」

「あ、貴方も記憶持ち？」

サラっと言うと、リーファはこくりと頷いた。

「そっかー。えと、私と同じ異世界人？」

「異世界人なの？ あれは向こうの剣術？ おかしいと思ったんだ。物凄く変な癖がついてるから。まるで、棒の重ささえ重すぎるみたいな、身体能力が低すぎるみたい……」

あ、やべ。私は笑って誤魔化した。

その後、私達は果物を持って二人並んで話をしていた。

「君も、一般人になりたくて？」

「え、えと、リーファは？」

私達は二人、笑って誤魔化した。

「えと、担当官を聞いてもいいかな」

「私のパパンはルヴァキル様」

「……僕もだ。悪魔と取引してでも、一般人になりたいと思ったから。君も？」

「私はパパンが空いててイケメンだから。そういやパパンの担当私だけだわ」

一瞬の間。そしてリーファは笑った。

「僕の時もそうだよ。そっか。パパンか。いいな。ね、君は秘密を守れる？」

「友達いないから話す人いないよ。私もバラされたくないし」

「じゃ、自己紹介で前世と願いや今回のポイントの事、一緒に言わない？ 僕も秘密にするよ」

「んー。いいか。いいよ」

私達はせーのと言う。

「元勇者、男。願いは一般人として人生をやり直したい。綺麗に生まれたい。女の子として生まれたい。ポイントが多すぎて、完全な一般人には慣れなかったから、今世では力を隠してる。ここへは、貴族に手籠めにされそうになって逃げてきた」

「えっと、こっちで言うところこ遊びの天才、かな。元女。願いは記憶、人格、頭脳の保存。お前の人生マイナス三万ポイントって言われたから、ふざけんな私の人生は三ポイントだあって前世セツト三ポイント計算で産まれた。健康を得るにはちよっとポイント足りなかったから男になったの。ただ、マイナス三万ポイント計算の能力も持つてる。私の人生の価値が掛かってるから、使う気はないけどね。ただ、パパンと話せる能力があって、それはいつも使ってる。向こうが勝手に夢に尋ねてくるのよ」

私達は沈黙した。

その後、リーファが爆笑する。

「マ、マイナス三万ポイントってどんな前世だったの！？　すごい力を持たせられるって事は悪人じゃないんだろうけど。あはは、ぼ、僕より多いよ！　くくっあ、ごめ、でもルヴァキル様、いや、パパンと話せるなんて凄いな」

「勇者よりポイントが高いとはこれいかに。ちなみに私のチートは7つまであるぞ！　しかし、オカマ勇者かー。親近感湧いてきたわー。男と恋愛とかした？　でも貴族からどうして逃げたん？　一般人で女の子で美人だと、手籠めとか人身売買ルートしか無いじゃん。玉の輿だからいいんじゃない？　不細工だった？」

「オ、オカマじゃないよ！　ただ、姫さまみたいに愛されて、守られるのが羨ましくて……ちやほやされてみたくて……。でも、実際に生まれ変わって見たら、女の子ってすごく大変なんだ。剣を振っている方が性に合ってるし、いざ口説かれたら怖くて気持ち悪くて……」

「私も女を抱く気はないなあ。育って性欲出てきたらどうなるかわからんけど。それに私、男は絵が一番好きだなあ。格好いい人いたらそりゃときめくけど。セックスはいらんわー。ね、いつか困ったら偽装結婚しない？　大人になっても相手がいないと体裁悪いじゃない。子供できなくても養子引き取ればまあ周囲の目は和らぐし。私貧乏だから、嫌かな？」

「助かるよ！」

「ちなみにレズ？」

「じ、実は僕、女の子って少し苦手なんだ。守らないといけないし、相手が大変だし……」

私とリーファは微笑み合う。

「でも、それだと僕も稼がなきゃね。冒険者は意味がないしなあ」

「でも好きなんでしょう？ 戦いが。気にせず好きな事すればいいと思うよ。隠れて魔物退治してもいいわけだし。リーファは特に縛りはないんでしょう？ 主にチートを使うと前世の価値が全否定されるとか」

「確かに、力を使うとまずいつてわけじゃないけど。気にせず、好きな事を、か」

「バレたら逃げればいいよ。独り立ちしたら親は関係ないし。旅とか好きだよ？ でも私にチート使わせようとしたら即効見捨てる」

「わかった」

それから、私とリーファはよく遊ぶようになった。

薬草辞典はいらんけど、リーファから色々教えてもらうのは全然オツケー！

でもおかしい。VRMMOでは一目で見分けついたのに、現実の草は見分けつかんとか絶対におかしい。

世の中はきつと不条理で出来ている。

ちなみにリーファと会った日の夜、パパンが来た。

早く孫の顔が見たいと言っていた。偽装結婚だというに。

なんか、突然変異のチート持ちより親の素養を受け継ぐチートの方がポイント低く済むらしく、恐らく二人の子の枠は大人気になるだろうとの事。

あの、王様の長男にしろっていったおっさんがたくさん来るのか

……。

嫌だわー。怖いわー。絶対愛する自信がないわー。

子が親を選べるのに親の方が子を選べないというのは不公平すぎると思う。マジで。

素質目当てに生まれてくる子なんて絶対嫌じゃん。

私の子はもれなくチートオリ主転生になるのか……子作りなんて絶対しないわ。

リーファに気持ちを話すと、リーファも王様狙いのチンピラの話にドン引きしたらしく、納得してくれた。

パパンは泣いていた。

んなもん知らんよ。

あ、リーファはママンの事をママンと呼ぶようになった。

私もリーファのお父さんの事を父上と呼んでいる。

事実上の婚約である。ママンと父上は喜んでくれている。

こっちでは腕輪だが、リーファには元日本人として指輪も贈ってあげたい。

料理研究もしたいし、稼ごぞー。

……しかし、実際の料理って大変だね。物が溢れたり焦げたりするんだぜ？　ありえない。

ちなみにリーファの顔はあの後見せてもらった。馬鹿じゃね？

マジ馬鹿じゃね？　こんなんが歩いてたら、攫われて売られて犯されるに決まってるじゃん。それぐらいわかれ。リーファが今まで無事なのはきつとパパンの加護以外の何者でもないと思う。

前世もこの世界で生きてたならわかるでしょ。パパンも願った段階で教えてやれよ。なんでもたくさん与えれば幸せになれるってわけじゃねーんだよ。

そう指摘したら泣かれた。

何か私に指摘されたのがショックだったらしい。

パパンもリーファも酷過ぎる。

一話 結婚しても子作りの予定はないですよ（後書き）

注意書き：書きたい事は三分の二ほど書ききったのでこの後は何も決まってるじゃないです。勇者はこのまま良き友でいるかも知れないし、ヤンデレるかもしれないし、（チートバラす的な意味で）裏切るかもしれないし、他の人間に恋するかもしれません。

期待しちゃ駄目よ

二話 パパンのラブが重いです

「これをこうして……そうそう」

私とリーファは刺繍のお勉強をしていた。
午前は刺繍、午後は剣技である。

「リーファは本当にルグナくんが好きだね」

「ルグナもリーファが好きなのよ。いつもリーファちゃんのお話ばかり」

両親が見守りながら、暖かく会話する。最近いい雰囲気である。

二人が結婚したら素敵なのに。主に経済的意味で。

ま、リーファンとこも夜逃げしたせいでお金ないけどね。

あ、リーファも外じゃ苛められ気味。当たり前ですよー。仮面じゃあ……。

最近は二人で小さな魔物も取ってくる。

あくまで子供が狩っても問題ない、小さな魔物である。

子供の手に余るはずの大物を狩った時はその場に捨てている。

最初の頃は大変だったけどね。だって……現実って血が出るんだぜ……？

素材つてのは、皮剥とかして得られるんだぜ……？

とにかく、私達は、互いに支えあって少しずつ成長している。

リーファは独り立ちが割りと目前だったりするけど、仮面したままで働ける所はあまりない。

「つか顔焼けば？」と言ったらパパンに超怒られた。

そういうわけで刺繍やなんかは大切なお仕事だ。

魔物の素材なんかを売った余剰金額で色々買い、最近ではリーファ

に着せる服を作っている。

目指せ悪の幹部っぽい服。

後、代筆業も始めました。

リーファに教えてもらって私が書いている。

現代日本出身の私としちゃ、代筆業っていずれは消えるでしょーってイメージがあるので、本業にはしないけどね。

旅もするんだし、出店で刺繍がいいかなあ。

一応、ママンには将来、リーファと結婚して見聞を深める旅にするのもありだと思っていると告げている。

ママンは定職について欲しそうだった。

ファンタジーだと、旅人とか冒険者が主流だよね？ 意味分かんらん。

パパンの意見は却下ね。宮廷魔術師になってハーレム建設って親が言うことか。

ということとで回想している間に服が出来たのでリーファの所に持っていく。

「似合う、かな」

どこから見ても悪の幹部。超格好いい。制作に半年かけたかいがあった。

私は手を叩き、褒め称えまくった。

「素晴らしいＹＯ！ どうかどう見ても怪しいよ！」

「ほめられてるの、かな……？」

そう言いながらも、リーファは頬を染めて自らの姿を術で写し、眺めている。

鏡なんて高級なものはないです。

中二病心をくすぐる服を、リーファはなんだかんだで気に入ったようだった。

勢いに乗って二人でそのままギルドに出かけたら絡まりました。何か凄腕魔術師と勘違いされたっぽい。

「服を作ったから幼なじみの一般人に来てもらったんだYO！冒険者なんだからそこらへんの餓鬼と凄腕魔術師の区別を付けられるようになるがいいよ！主に身振りとかで」

リーファの後ろに隠れながら主張する。

「服を作ったって……お前が魔具を？」

「ほえ？」

そこに、魔術師らしき人がやって来て、歩み寄って私と服を交互に眺めた。かなり立派な服を着ている。

「坊やに魔力はないようだ。これは、祝福だね。たまに、神様に気に入られると祝福が与えられるんだ。珍しいデザインだから、神様が気に入ったのかもしれないね。譲ってはもらえないかな？」

「え……。えと、リーファ」

「僕はいいよ。着替えてくる」

「坊やは、服を作る職業につくつもりなのかな？祝福っていうのは神様に腕前を認められたという事。一度気に入られた人は、祝福持ちの道具を作りやすい。きっといい職人になるよ」

「あ、ありがとう」

その後、リーファはいつもの白いローブに着替えてきて、ローブを渡した。

うん、何か凄い心当たりがあるね

ちなみに結構な金額になったそれはリーファに渡した。

帰途に着くと、私は早々に眠った。

夢にはやはりパパンが現れた。

「パパン」

「なんだ？」

「祝福。したでしょ」

「し、してないぞ」

私はじとつとパパンを見る。

「他の神にしてもらったが」

「パパン！ 過保護もいい加減にしてYO！」

「正当な評価だ！」

「子供の作った安物の布と縫い目の荒い服のどこが正当な評価なんだYO」

「本当に、着たいって子がいたんだって！ 食べ物なり、物なり、コピーしたら祝福するのが決まりだし……」

「んー……。わかった」

「なあ、ルグナ。俺にも一つ作ってくれ」

「……まあ、いいけど。祝福は最低限にしてね？　で、希望は？」

「そうだな……」

これは確実にお金に変わるからと、ママンにお金を借りてちよつと良い生地と糸で作った。

これも半年ぐらいかけて縫ってリーファとギルドに売りに行く。完成した時点でパパンが持つて行っているから心配はいらない。あ、羽入れる穴は自分でつけてくださいって言った。こっちは羽のついた種族なんて無いからね。デザインだけ後から穴を入れることを考慮した作りになってる。

「パパン、喜んでた？」

リーファはクスクスと笑って聞く。

「喜んでた喜んでた。調子に乗って手料理も作れとか言ってた。祝福するって言ってたから借りたお金をママンに返した後は山分けしよう」

「いいのか？」

「いいよ。大人になったら夫婦になるんだし」

「ああ、うん……な、なんか照れるな」

そうして二人でギルドにつく。

「おねーさん。鑑定して。また祝福ついてるかもしれないし」

「あら、ルグナくん。そうそう祝福は……ついてるわね。すごく強力なのが。あらちよっと困ったわ。ギルド長呼ばなくちゃ」

なんですと？

結果、とんでもない金額になった。

そして魔具神殿からオファーが来るかもしれないと言われた。

阿呆じゃね？ パパン阿呆じゃね？

こんな大金持ってたら襲ってくれと言っているようなものなので、ギルドに預けてたまに必要な分だけ引き出すことにした。

ちなみに魔具神殿とは、様々な物を祭壇に捧げる簡単なお仕事をしている場所だ。

神様にとってのお店みたいな場所で、そこで気に入ったものがあればコピーを貰って祝福を授けるというものだ。

神様は子供からのプレゼント嬉しい、神殿も祝福嬉しい。

これぞウィンウインの関係。

でも祝福乱舞は禁止されているらしい。祝福乱舞は禁止されているらしい。

言いたい事はわかるね？ パパン。

結論から言おう。

珍しく一人で遊んでいたら誘拐された。魔具神殿への売買ルートキタコレ。

それとも閉じ込められて魔具生産かな？

どうせ祝福するのはパパンだけだろうし、祝福乱舞は禁止されているし、こりゃ用無し殺されフラグだな……。

それだけでなく、子供が祝福受けないと殺される、もしくは解雇されるって状況だからと祝福するのは禁止されている。超禁止されている。どれくらいかというと、物の良さの測定が行われるくらい。時には祝福を完全禁止もありうる。

でないと同じ状況が多発するからだ。神様はいつもより多くの子供達の幸せを考えている。

つまり、オワタ。

あーあ。

しかし私はVRMMOでの経験を生かした大逆転を執行するのであった。多分。

三話 それぞれの努力

SIDE ルグナ

ふつくつろつに入れられて！。エッサホイサエッサホイサエッサ
ホイサとっ

あ、馬乗った？ いやん揺れる吐く吐く吐くって吐いた！ 臭い
！ 顔にかかった！

SIDE リーファ

あれ？ いつも先に来てるのに……。いないな、ルグナ。

「さつき子供が攫われていったぞ」

「大丈夫か？」

まさか、まさか！

「あの、それってどんな子供でした！？」

「どんなって、どこにでもいるような茶髪の男の子だったが。冒険
者かい？ 怪しい格好だな」

「どっちの方に行きました！？ し、知り合いかもしれないんです
！」

「あっちの方向だよ」

「ありがとうございます！」

ルグナ、もしかして魔具狙い！？　どうしよう、魔力隠蔽能力があるから探索術は効かない、何より他の魔術師に感づかれる。

大丈夫、魔具狙いならすぐには殺されないはず。

落ち着いて探すんだ！

ルグナ、ルグナ！

SIDE　天界

「ルグナが攫われたアアアアア！！　ノア！　お前の担当の子供だろう！　どうにかしろ！　どどどどうにかしないと！　そうだ下界へ行こう！」

「落ち着きなさい。あの子達は必ず悔い改めます。貴方はもう少し子供を信じなさい」

ノアと呼ばれた天使はお茶を飲みながら、慌てるルヴァキルを宥める。

「……この前もそう言いましたが、攫われた私の子は犯されて売られて売れなかったのは殺されましたね」

ぼそつとエルフのエリアが告げると、ルヴァキルは青い顔をした。

いい加減、ノアもエリアも子供が誤ちを犯してしまったり、悲しい最後を迎えるのは慣れている。もちろん、愛している事に変わりはないが、勝者がいれば敗者がいて、生まれている時しか手を貸してやれないのだから仕方のないことだとわかっている。

しかし、ルヴァキルは未だに慣れない。特にルグナには手をかけていたので、なおさら動揺は激しかった。

「下界へ行く！ 手続きして来る！ そうだ、手続きの間の足止め
に魔物出してもらわないと！」

ルヴァキルは走る。いつもなら引き止めるが、今回は5回までルヴァキルの暴走は許されている。その暴走の機会は、国の存亡などに出てこられるよりも、このような些細な願いに使われたほうがいいだろう。

子供を直接手助けできる事を羨ましく思いながら、神々は彼を見送った。

S I D E ルグナ

小屋に降ろされました。不機嫌です。超不機嫌です。
美形だからってなんでも許されると思うなよ。元乙女をゲロまみれにしたのは許されない罪です。

「水よこせ。暴れられると困るって言うなら、しばっててもいいから、洗え。お前のせいで汚れたこの顔と頭と体を、洗え」

「お、おう」

水の入ったタライと布で、体を綺麗にしながら問うた。

「お兄さん、服が綺麗で若くて美形だね。なんでこんな事したの？」

「はっ子供にわかるか。お前は俺の言うとおりに、俺の代わりに魔具神殿に出す物を作るんだ！」

……は？ 代わりに出す物を作れと申したか。

「……確認するけど、魔具神殿に売り飛ばすんじゃないの？」

「そんな事しても俺の成績にならねえじゃねえか！」

アホじゃないの？ アホじゃないの？ アホじゃないの？

「ぼくの作った物を、お兄さんの代わりにそのまま出すの？」

「そうだ！」

このアホ、職人としてのプライドがないのだろうか。

「お兄さん、ぼくの作ったもの見たことあるの？」

「ああ、縫い目が下手だしへんてこだし、どうしてあんなものに祝福が与えられるんだか不思議でしょうがねえがな！ あんなんだつたら俺の方が立派だね。これだから神に愛された奴つてのは卑怯なんだ」

「お兄さんの作ったものの、見てみたい！」

「おうよ、見てみる！ どの道俺の作った物に似せて作らせる予定だからな。つたく、一週間もかけて作ったのに、また祝福がつかなかったんだよ」

自信満々に見せられたのは……。なんていうか……。豪華っぽいだけで絶対着たくないわー……。

「お兄さん。その服、祝福なしだといくらで売れるの？」

「祝福なしの服なんざ売れるかよ！」

「人間でさえ買わない、たった一週間で出来る量産品を、どうして神様が着たいと思うの……？」

「……」

「……」

蹴られた。職人気取りのこのアホは死ねばいいと思う。

「俺の作品が量産品だと!？」

「僕、一着半年かけるよ。おにいさん、我慢して待てるの?」

また蹴られた。

「お前はとにかく量産すればいいんだよ！」

「お兄さん、若いよね。もしかして、勘違いした? ちいちゃい子や若い人が作った出来の悪い品を、いーこいーこ、次頑張れって、おもしろ半分に買っていく事はあっても、いい年した大人が量産したゴミを毎週買うバカはいないよ。愛されてるとか愛されてないとか、馬鹿じゃない? いや、愛はあるか。お兄さんごときの作ったものを今まで祝福してあげたことがもう愛だよね」

せせら笑うと、更に殴られる。

「商品に傷つけるの？ どこまで馬鹿なの？」

「うるせえっ才能のある奴にわかるか！ 恵まれた奴に何がわかる！ 俺は、俺は……！」

「底辺を味わったこともない癖に、何いってんの？」

血を吐きながら、吐き捨てる。

「飢えた事がないよね。着るものに困った事もないよね。技術が全く無いわけでも無いみたいだし、美貌もある。全部持つて、高望みしなければ職人でも男娼でもなんでもやって生きてけるよね。生まれ、才能、美貌、それだけ揃ってよく言える。私の服なんざ、ちよっと子供が目新しい物作ってるからって買われただけなんだよ。その程度もわからないほど、脳みそ空っぽなんでちゆかあ？」

殴られる。

「無抵抗の餓鬼を殴るのは楽だね。神様の事考えて、神様に着てもらいたい服、人間よりもドワーフよりもずっと優れた服を作るだろう神様に、「お願い、着て」って言える服、そんな服を作った事、一度でもあるの？ あんたを下界に送り出した神様と祝福した神様、今頃泣いてんじゃない？」

殴る。殴る。殴る。

ボロボロに成った私は、ただ蹲るしかなかった。しっかりと男を睨んだまま。

私は小屋に閉じ込められた。羊皮紙と共に。とりあえず明日また来るので服のデザイン考えとけだそうだ。

私は基本、やりたい事しかやらない人である。よつて羊皮紙は目のつかない場所に放り投げた。

わかつてる。素直にニコニコ言う事聞いていれば、どうとでもな
つたて事。

わかってる。チートを使えば、どうにでもなるって事。

でも、私は私なのだ。

どうしようもないこの私が、
たまらなく愛しい私なのだ。

パパン、心配するかな……会いたいと思ったパパンは、この日に限って夢に現れなかった。

SIDE
リーファ

よかった、向かった方向は関所じゃない！

もう門も閉じるし、朝までに見つければいい。

候補地は大体70前後。

見つけてみせるから、待っていて、ルグナ！

何あれええええええ！！

魔物の大群！？　こんな時に！　子供でも倒せるような弱いやつ
 だけど、この数は邪魔！

ルグナアア！

SIDE
天界

「ルグナが死んだらどうする！ 急げ！」

「いいえ！ 今日の仕事が終わらない限り、降臨は許しません！
致命傷じゃないから大丈夫です！」

「致命傷じゃないってなんだああああ！」

SIDE 職人

……あの餓鬼、死なねえよな。死んだら使えなくなる。
思い切り、壁を叩く。

っわかってんだよ！ わかってんだよ、俺が甘ったれの糞野郎だ
って事くらい！

ああそつさ、俺が魔具神殿で祝福を受けられたのは、あいつと同
じ年で服が作れたからだ！

ちっちええ子供の作った物ほど、祝福を受けやすいって知ってん
だ。

知ってたんだよ……。

だから俺は首になる前に、こっちから飛び出して……それであの
餓鬼の事を聞いて……。

ちっ頭ん中ぐちゃぐちゃだ。

……初めて祝福を受けたのはなんだっけ。金に困って売っぱらっ
て、もうどんな物が覚えてすらいない。

俺を下界に送り出した神様、か……。珍しい神話を知っていやが
ったな。全ての人間は、神に祝福を受けて生まれてくるってやつ……

俺は信じちゃいなかったが……。

俺は……。俺は……。

……神様に着て欲しい、ドワーフよりも優れた服を作る神に向か
って、それでも着て欲しいと願える服か……。

俺は、紙にザラザラと描き始めた。
着て欲しい服、着て欲しい服……。

あの餓鬼が半年かけて作るんだ。俺は一年かけて作ってやろう。
なに、祝福が受けられなかったら、王族にでも売ればいいんだ。

……最低でも王族が着たいと思う服を、作ればいい。

俺は頭空っぽの顔だけ王子を思い出して、顔を顰める。

売るのはあいつ以外がいいな。つか、俺も顔だけとか男娼は嫌
だ。

……嫌なんだ。俺は職人でありたい。くずでも下手でも、職人で
ありたい。

あの餓鬼は、明日返そう。

三話 それぞれの努力（後書き）

語尾のYOがうざいという感想がありました、わざとです。
主人公はうざく！ アホに！ なにせ二ートですから！。

あ、リーファの服の祝福、あれパパンが他の神様に自慢しまくった
からです。

四話 神様はいつも君を見守っている

SIDE ルグナ

暇。

暇。 ひま。 ヒマ。

そうだ、ここは悲鳴を上げても誰にも届かないと言っていたな。

ここは一つ、プライベートタイムを楽しむべき。

断じて寂しいからじゃないからね！

いやー、家、貧乏で部屋が一つしか無いから、プライベート無いんだよね。

……さて。

私は不思議な踊りを踊り始めた。

見よ！ VRMMOでどれだけ変な動きが出来るか競い合い、見事一番をとってみせたこの姿を！

でも関節が逆に曲がらないのが辛いなー。

私はしばらく踊っていた。

……疲れた。なんだあいつ、まだこねーのか。扉を蹴るが、そんなじゃ開けられない。

このまま忘れられたりしないよな。

そのまま飢え死には嫌だなあ……。

短い一生でした。とりあえず、今のところチートは使う気無いけどさ。死んでも。

んー。

なんだろ。微妙に覚悟は決めてるけど、じつとはしてられないこの感じ。

これをそわそわするとうんですね！

次は一人劇場でもやるかー。

ふ……驚くが良い。

私はVRMMOで五キャラまで同時にコントロールできていた！
そんな私の一人芝居、受けてみよー！

題して！

「彼氏ったら酷いの。メイド服を着るのが好きなんですって。そりゃ別れて当然だわ。そうよね！ 私はネコミミ裸エプロン派なのにー！ 友達やめよつか」愛と涙の冒険活劇！

SIDE 天界

「ルヴァキルは行ったようですね。まあ、怪我は後遺症なく治る範囲ですし、後遺症があったとしてもルヴァキルが治すでしょう」

「おや、御覧なさい、ノア」

エーリアがノアを呼び、ノアは下界を覗いた。

「？ あら可愛い。踊っているわ。変な踊り。ビデオ撮りましょう」

二人がじつと見ていると、なんだなんだと神々が寄ってくる。そのうち、お茶会が始まった。

ルグナを眺めながらお菓子を食べ、書類を片付けていく。

「可愛い可愛い。子供が踊るのは良いのう。子供はたまに愉快的動きをするわい」

「お、一人芝居が始まりましたね。あはは、可愛い」

「うまいうまい」

「くだらんのう」

和やかな雰囲気で神様が増殖していく。

ところで、祝福は食べ物や物だけでなく、剣技や劇にも与えられる。

小さな子供を遊ばせておくと、いつの間にか菓子を食べているというのはこの世界ではよくある風景である。

そうして、神々の撮った可愛い子供の動画や、神々が強く祝福した魔具は、神々のアルバムに描かれる。

これは超強力な魔具いや神具として、下界でも僅かに流通していたりする。

アルバムには戦闘や防具、武器、可愛い子供の悪戯など、多岐に及ぶ。

昔、孤独な戦士が、「誰にも知られずともいい。ただ、小さな部屋、胸を張って、俺は頑張ったと言えればそれでいいのさ」と、強力な魔物を屠ったことがある。

それは決め台詞と共に各種アルバムに乗せられ、表彰され、ついにお告げで戦士を讃えよ！と言われ、吟遊詩人に歌われ、なぜか当の戦士が泣いて逃げたという確かな実績を残している。

神々は和やかに、和やかに、子供の可愛い劇を撮り続けた。
もちろん、劇をじゃまする魔物やルヴァキルの攻撃呪文は排除で
ある。

S I D E 下界

「……くっそろそろ門が開いてしまう……！ 最も、それどころじ
やないみたいだけど。一体、この魔物の群れはなんだというんだ！
？ 魔王復活！？ くっ転生してすぐにまた魔王と戦うことになる
とは！」

魔物の群れが真つ二つに避ける。

そこにいたのは……！

「パパン！！」

「うおおお！！ ルグナはどこだああああ！！」

悪魔が、大きく吠えると、町外れの小屋以外の全ての屋根が吹き
飛んだ。

吹き飛んだ屋根は道端に落ちる。リーファの行く道を塞ぐ形で。

「……パパン……」

「降るのだ！ 眠りの雪！」

しんと降る雪に触れた兵士たちや、家に隠れていた人々は眠
っていく。

「パパン……」

「パパン！」

「アホかあああああああ！！！！！！！！」

リーファの、渾身の剣の一撃がパパンを吹き飛ばしていた。
悪魔を一撃のもとに倒す、勇敢なる仮面の戦士。
それは人々の心と神々のアルバムに焼き付いた。

「ルグナは僕が助けるから、帰れ」

「し、しかし……」

「帰れ。邪魔だから帰れ」

ぶちきれて襟首を掴み、説得するリーファ
こうして、泣く泣くルヴァキルは帰っていった。

S I D E 職人

なんだか昨日の夜は悪魔が訪れ大変だったらしい。全部の屋根が
吹き飛んだとか。

眠る人が続出で大変である。

三階の宿の一階に泊まっていて良かった。

魔法とはいえ、雪は雪。俺のスケッチブックが汚れてはたまらな

い。

さて、餓鬼のところに行くか。

SIDE ルグナ

人の気配がしたので、劇をやめた。

やれやれ、第三部までやってしまったではないか。
遅いぞ職人。

「餓鬼、やっぱりお前いらねえ。返すわ。ほらよ」

投げられたのは、薬……？

「飲んでおけ」

ちょうど喉が乾いていたので、つい飲み干す。すると、痛みが消えていった。

それを見て、職人が頬を緩める。

何こいつ……これが不良が優しくしたらキュンとなるとか、吊り橋効果とか、ストックホルム症候群とか言う奴か……！？ イケメンはこれだからけしからん！

と、そこに、大量のお菓子や果物や飲み物、花、小物が降ってきた。

「……なんか踊ってたりしたのか？ やっぱりお前、神に愛されてやがるな」

「？」

「劇や踊りが気に入られると、アルバム登録されて、神様がプレゼントしてくれるんだよ。こういう祝福はお菓子が大半だからすぐわかる」

「……見てたの？ アルバムって何？」

「王侯貴族が持っている、各地の可愛い餓鬼のお遊戯や優秀な剣士達の戦い、あるいは魔具の詳細を収めた本だ」

……。

＼（＾０＾）／オワタ

ふざけんな密室で安心して何が悪いプライバシーとかふざけんなええええ！？

「俺は、魔具神殿に帰るよ。そこで勉強しなおしだ。お前も帰れ」

何その勝手っぷり。

とにかく、私は部屋を出た。

「ルグナ——！」

「リーファ！ 探しに来てくれたの！？ …… って何これ！ 屋根吹き飛んでるじゃん！」

リーファは私に抱きつき、訴える。

「助けが遅れてごめん！ えと、パパンが弱い魔物の大群に町を襲わせて、大声でルグナはどこだああって、屋根が吹き飛んで、それで、触ると眠る雪を降らせて、とりあえず殴って返したけど、眠った人が起きなくてどうしようルグナアアアア」

「え。なにそれどういう事？ 怖いんだけど。パパンて悪魔？ お前何者？」

……。

うむ。

召喚回数減ってる。呼んでないのに。呼んでないのに。呼んでないのに。

私は深いため息をついて、ぱちんと指を鳴らした。

「ルグナああ！！ ルグナの一人劇場見逃した！ 親の俺が何故アルバムで我慢しなければいけないんだ！ もう一回やってくれ」

「ひっ悪魔！」

現れてすぐ私に抱きつくパパンに、怯える犯人。

「うん、一人劇場はアルバムから抹消してほしいな」

「嫌だ」

「抹消しろ」

「嫌だ」

「抹消しろおおおおお黒歴史大公開とかふざけんアアアアアア
ア!!!」

私の必死の訴えに、どうやらパパンは納得してくれたらしい。

「後、雪で眠らせた人起こして。これ、召喚としてカウントしていいから」

私の中で、二つカウントが減る。

「んで、私があげた服、来てみてよ。これもカウントね」

「そんな事でいいのか?」

「うん」

パパンが手を振ると、服が変わった。うん、似合ってる。ああ、でもやっぱり服が粗末すぎるなあ。もっと腕を上げないと。

何か犯人は凄く呆けた顔でパパンを、具体的にはパパンの服を見ている。

「パパン。最後の一回は、結婚式だから。今度勝手に来たら、結婚式招待しないから」

「なんだと!？」

驚愕するパパン。

「じゃあね、パパン。さて、犯人、行こうか」

「な、何だよ？」

「もうこの街にはいられないじゃん。挨拶だけして、出る」

「あの、ルグナ！」

リーファは、切なそうに告げる。

「僕、父上とママンを置いてけない。それに、僕は目立ちすぎた。ついていくのは、無理だよ……。足手まといになるし、適当にごまかす人間がいたほうがいい。だから……。ごめん」

「いいの？ リーファ」

リーファは、頷いた。

「パパンを叩いた時、気持よかったんだ。やっぱり、僕は勇者としての僕に、凄く未練があるんだと思う。自分を見つめ直したい。いつか、また会おう。これ、受け取ってくれる？」

渡されたのは、対の腕輪の一つ。

「先にプロポーズされちゃったね。ありがたくもらっておくね」

私はその腕輪を嵌める。

「じゃ、行くよ、犯人。魔具神殿へ。後、私の名は今日からルナだから」

「マテよ、俺は連れて行くなんて一言も……げはっ！」

リーファが、犯人を殴りたおし、すぐ側に剣を突き立てる。

「ルグナに何かあつたら殺す。悪魔に愛されし子に傷ひとつつけたらどうなるか、身を持って知つたろう。次は国が滅ぶぞ」

冷たい眼差しでリーファがいい、犯人はこくこくと頷いた。
そうして、私と犯人は旅立つことになったのだった。

町が、もうあんなに小さい。
私はそれを目に焼き付けた。

「あの、ルナ様」

「何、マノ」

「ルナ様はあの悪魔様の子供なのでしょうが」

私は肩を竦める。

「この世界の人間は全て神の子だよ。私を転生させてくれた神様があの人。パパンは凄く過保護な方だと思うけど。ちなみに、転生させてくれる神を選ぶのは人。生まれや才能や外見を選ぶのも人。子が親を選び、親は子を選べない。言ってる意味わかる？」

「じゃあ、なんで出来る奴と駄目な奴がいるんですか？」

「立派な人生を送ると、ポイントが貰える。それとランダムのポイントと基礎ポイント、これを生まれや才能や外見に振り分けるの。といっても、調整が必要だから希望が三つ言えるだけなんだけど。マノは美貌と生まれと才能に振ってるんじゃないかなあ」

「うげ。もうちょっと才能に振るときゃよかったのに」

「振った時の記憶がないから、才能に振ってその道に進まなかった時が危険だよー。でもまあ、マノは全部自分で選んだんだから、自己責任だよ。神様に愛されていないとかいうの、今後禁止！……マノを祝福して愛してくれている神様はちゃんというから」

「俺を愛してくれる神が……」

「ポイントの総量が足りないと思うなら、良い事いっぱいして来世の為にポイント稼ぎなよ。それに、神様がマノに出した宿題を見つけてクリアすれば、もっと才能強化してもらえるかもよ！」

「宿題！？　んなもんがあるのか！？」

「うん。一人一個。私は働けた。まあそんな感じの宿題だから、精一杯生きてればいつか出来るよ」

「そうか……」

マノは、じつと手を見る。

「神様は、俺の作った服を着てくれるかな。悔しいけど、似合ってたぜ。あの服」

「ちいちゃい子からのプレゼントはともかく、立派な職人からゴミは受け取らないと思うYO！」

「うつ……ひでえ。いいよ、やってやるよ。初めてなんだ。こんな気持ち。俺の服を、神様に来て欲しいんだ」

「その年でそのセリフは致命的だと思うYO……。つーかよく祝福もらえてたよね」

「い、今から生まれ変わるんだ！」

「ガンバレー」

「お前は頑張らないのかよ」

「次作る服はもう決めてるから」

マノに着せることも決めているよ。

私はまだ、ボコられた復讐は、していないからね！

五話 こうして精進料理は消滅した

魔具神殿についた。

ここから私の新しい第一歩が始まる。

神々よ！ 私は一つ宣言しておく。

パパン召喚チートはノーカン！

おいやめる回数を復活させるなそういう意味じゃねえ。

……。戻った？ 回数ラスト一回に戻った？

頼むよ、困るんだよ。あんなチートいららないよ。

うん。泣かないでパパン。ごめんね。

うん？ 召喚を願いを叶える回数とカウントするならば、願いを叶えずに降臨するのもありなはず？

……パパン。ありじゃありません。

やめてください。わたしの幸せのために。私の幸せのために。私の幸せのために。

私のこの頭脳と！ 記憶と！ 人格で！

私は立派に生きてみせるよ！

「おい、独り言は終わったか？」

「うん、話し合いはついた。さすがに魔具神殿だけあって、学ぶ所がいっぱいあるんだね」

「詐欺も多いぞ」

「工房借りるだけだからいいよ」

「……作り方わかるのか？」

「さっぱり！ でもまあ何とかできるっしょ」

主にVRMMOやってた時の勘で。

だいじょーぶ！ 人類は皆、石を木の棒に括りつけた物から銃へと技術を発展してきた！

二足歩行ロボが作れるとは言わないが、私も0から頑張つて鉄器時代ぐらいまではいけるはず！

「……うちの工房に来るか？ 有料だが、住む場所はあるし、好き勝手見れるし、好き勝手な物を作れる」

「いいの？」

「有料って言ってるだろ」

という事で、マノの工房とやらについていく。

そこで、私は思わず声を上げた。

そこにはいろんな施設があつたのだ。

焼き物も、服も、武器も、アクセサリーも、絵画も、あらゆる物を作る施設がある。

台所も完備で、かなり広い。施設自体は使い込まれているが……。やはりマノはいい所のボンボンである。

いろいろ案内してもらう。

最後に案内されたのが、魔具神殿の下級祭壇だった。

誰でも祭壇に祝福して欲しい物を置いて祈ることが出来るらしい。祭壇には神官が常駐していて、祝福がされると、魔具神殿が優先的に買い取る権利を得る他に、わずかながら報奨も出る。

物にもよるが、本当にわずか。子供相手なら飴とか。

不思議と、魔具神殿に献上予定の物は祭壇にあげられるまで祝福が起きないらしい。

上級祭壇ももちろんある。それは魔具神殿内にあって、魔具神殿で暮らす職人が物を捧げる時やかなり大掛かりな物を捧げる時に使うらしい。

早速入居申請を行い、見学を行う事とした。

VRMMOで鍛えたセンスを舐めるなー（バリバリ）

ところで魔具神殿に祀られていた神様達を天界で見た覚え無いです……。他のグループの担当官なのかな。

神様があの場にいた方達だけだとは思ってない。

しかし絵本等を見ても、パパンっぽいのか見た覚えがなかったので、なにか寂しい。

材料もいろいろあるし、まずは食事ついでに手料理をパパンに捧げてやるか。

ちなみにモノはバイトしながら制作に入るらしい。

私は色々と材料を買い込む。パパンにはリクエストされた肉料理があるのだ。

納得が行く出来の物が出来るまで、何度も作る。

残った物は食べていいよと言い残して、出来たものを神殿に持っていく。

「……料理を捧げるのですか？」

「神様に食べて欲しいので。上手く出来たよ！」

「まあ、神は御心が広いですから大丈夫でしょうが、祭壇を汚してはなりませんよ」

「わかった」

料理を祭壇に捧げ、召し上がれ、と言ってみる。

祝福は最低限にして欲しいと事前をお願いしてある。パパンがル

グナと大声で叫んだせいで出る羽目になったことは気に病んでいるようなので、こんどこそ守ってくれるはずだ。

捧げられた料理は、ものすごい勢いで発光しだした。

……おい。

神官さんは驚いてそれを見た後、慌てて鑑定して、少し悩んで金貨を私に握らせた。

料理に祝福が授けられるのは新発見なので、その分の料金らしいいや、神様は料理を祝福すること多いつて聞いたけど。

多分気付かれないまま食べられているんだろぅなぁ……。

そして参考なまでにレシピを聞かれたので、教えておきました。

仕方ないから、これ全部料理研究費に使うかね。

もらった金貨で白紙のノートを幾つか買い、そこにレシピを記していくことにする。

最初のページはもちろんパパンの教えてくれた料理だ。

そして私は材料を色々買い込んで、だいぶ減っていた料理の残り物を食べて眠りについた。

「あつパパン！ 最低限の祝福にしてって言ったでしょ！」

パパンはなぜだかすごい勢いで落ち込んでいた。

「食べ逃した……。祝福というか、コピーは一度しかできないんだから……orz」

「あ、そうなの？」

「もう一回作ってくれないか？」

「それは、何度でも作ってあげるけど……。祝福は最低限ね。で、そんなに喜んでくれたの、食べた人？」

「ああ、奴も大好物だと言う事を忘れていた。そして横取りが好きだということも忘れていた」

神様にも難儀な性格の人がいたもんだな。

「まあいいけど。私の創作料理も気が向いたら食べてね」

「楽しみにしている。魔具神殿で成り上がりというのもいいな」

パパン、私があそこにいらなくなっただ事はもういいんですね、わかります。

イラっ　ときながらも、まあこっちでの生活も楽しくなりそうだしと思ひ直す。

気ままに適当にモノを作って売るといふ生活も悪くはない。

ライバルは阿呆ほど多いが、観光客もかなり多いので、そこそこの売上を見込めるはずだ。

特にこの私のVRMMOで鍛えた素晴らしい味覚とセンスを持つてすれば、頂点を極められるはずだ。

翌日、早速料理を作って下級祭壇に持っていく。

既にコックが長蛇の列を作って、祭壇に捧げる順番を待っていた。そして神官が時間の札を配っていた。

なんでも、神様が料理も祝福することが発見されたものの、冷めた料理は失礼だろうということとで捧げる時間は一時間に定められたらしい。

それで、おおよその時間を書いた予約札を配っているのだ。

下級祭壇はかなりスペースが用意してあるのに。すげえ。

コックさんは悲喜こもこも様子で料理を持って帰り、あるいはその場で売っている。

さすがに、料理は神殿で消費するというわけには行かないらしい。私は番号札の時間にあうように料理を作って持っていた。

今回はささやかな祝福を得て、もらった僅かな報奨金で、大安売りしている料理をいくつか買って帰った。

料理目当ての人が大勢いて、私の祝福付きの料理も売れた。

思わずたくさん買ったのでご馳走したが、食い詰めている人は結構多いらしく、喜ばれた。

しかし、コックが買いたる物に走りまくったので店が混んでいる上に食材が微妙に高くて品薄になっている。

仕方ないから、現在の食材は保存して、金属でも買おうか。

鍛冶にチャレンジである。まあ見よう見まねでなんとかなるっしょい。

すっごい火傷してマノに救出された。回復薬はもう持ってないから二度と怪我すんなって。

失敗失敗

とりあえず様子見しながら服でも作るか。

心配して下界に押しかけようとするパパンうざい。大丈夫だってば。

六話 私の料理は世界一いい!! (同ジャンルの料理人0的意味で) (前書き

んーと、Technical Artsに爆笑した直後に書いたの
で、かなり影響を受けていると思います。今話でやっているのは料理
だけです。後短くてすみません。

六話 私の料理は世界一いい！！（同ジャンルの料理人0の意味で）

なんか、あんまり豪快な失敗っぷりに、師匠がついてくれました。それにしても、私が知識を披露する度に吹くのはなんでだろう。

とりあえずエア鍛冶をやってみると言われて、言われたとおりにしてみたものすごいツツコミを受けまくりました。

もう鍛冶はやめようと思う。

「お前の鍛冶にかける思いはこの程度のものだったのか？」

「肉球系武器は買う事にする」

「ねえよそんなもん」

「な、なんだってー！？ 基本じゃん！」

「どこがだ」

「萌アイテムの！」

私が一生懸命に説明すると、職人のガノアさんは遠い目をした後、さつさとじゅぎょうの続きをした。

「しゃーない。マノに復讐しないとだし、鍛冶はするかあ。」

そんなわけで鍛冶の勉強、始めます。

まあ教わる方もてけーなら教える方も大怪我だけはうざいからすんなレベルのものなので、割りと私でも順応できている。

あ、料理もちよつとずつ覚えていくよ。服を作る準備も始めている。

なかなか忙しいです。

何か、料理担当になりつつあるけど、嫌いな洗い物は皆がやってくれるからいいや。

そして、半年が経った。

「できた！ 天使の誘いゝバーリト우드なバトロワでゝ！ 見よ！ この素晴らしい料理を！」

私が料理を捧げ持つと、皆がなぜかドン引きしていた。

「凄い見かけだが。そのカラフルな斑点はなんだ」

「見た目なんて飾りよ！」

「匂いが……ありえん」

「匂いなど、おまけよ！」

「お腹壊さないか？」

「危険を冒さずして何が美食か！ 古来より大勢の人達が命をかけて食べられるものと食べられない物を判別していたのだ！」

「味がいいのか？」

「笑止！ 味にこだわっているうちはまだ未熟者よ！」

「お前は何がしたいんだ」

マノのツツコミに、私は崇高な目的を教えて上げることにする。

「食べた時の衝撃、そしてそのリアクション！ それこそがネタ食の真髄！ 食べると吹っ飛ぶから！ 殴られたみたいに吹っ飛ぶから、ぜひ試してみてください！」

「アホかアアアアアアアアアアアア！」

マノが私を殴り、その後ろで一口食べてみたガノアが吹っ飛んだ。ふふふ、魔術師様の作った薬を頂いてきて作った我が最高傑作の威力を見たか。

これはレシピ入りだな。

そしてマノには復讐として無理やり食べさせた。

何故か、この私の素晴らしい芸術を誰も理解しなかったので早速パパンに食べさせるべく魔具神殿に献上に行った。予め予約札はとつてある。後、その場で売ろう。

「これは……！ こ、こんな物を神に捧げるのですか？」

「失礼な。最高傑作ですYO！」

「いや、失礼。確認しますが、毒ではないですね？」

「素晴らしさのあまり中毒性はあるかもね。とりあえず、持続性はない」

神官さんは不安に思いつつも、許してくれた。
料理には祝福がかけられたが、神官さんはいまいち祝福を解析しきれなかったらしい。

解析してもその効果がなんの意味があるのかわからないと言って
いた。

とにかく、小銭をもらった私は料理を売った。

「ず……ずいぶんな見かけで、かなり高いな。馬鹿か？」

ざわざわと遠巻きに見る民衆。

そんな時だった。私の目の前に、次々に物が降ってきた。
料理の祝福である。

長年の謎とされていた唐突な祝福は、実は道具の使い心地がよか
ったり美味しかったりすると起きるのだ。
料理をきっかけとして、最近判明した。

「味はいいってことか？ 坊主、一つよこせ。……ぐはあああつ！」

「飛んだ！？ 宙を飛んだ！？」

「ありえねえ！ 神様が罫に手を貸したと！？」

ざわめく人々。男が地面に接する直前、クッションが現れて男を
受け止め、消えた。

その後、お菓子が一つ、空から男の腹に落ちる。
神様は先程のリアクションに満足なされたようだった。

「あー、祝福ってクッションか。さすが神様」

私の言葉にどよめく人々。

「天使の誘いゝバーリトウッドなバトロワでゝ安いよ安いよー。一口で未知の世界が味わえるよー。しかも今なら神様の加護で安全に着地！」

結局、いくらもしないうちに売り切れ、私の周囲には菓子が転がっていた。

子供達が、せっせと菓子を拾っている。

ふ……私は天才かもしれん……。

最近、鍛冶もようやく形になってきた。

あと半年もすれば私の復讐は完遂する。逃がさんぞ、逃がさんぞ

マノ……！

私に手を出した美形であることを後悔するがいい……！

あ、レシピちょーだいつて言われたんであげました。

後でパパンにもレシピ強請られた。我が芸術は神すら動かすか……

……と良い気になっていたら、危ないからとクッション効果の付与されたレシピにして返された。

安全面にしか目がいかないとは、神もその程度だったか……。

いや、確かに危ないのでそのレシピは広めたけどさ。

さて、マノの服作るかあ。

六話 私の料理は世界一いい！！（同ジャンルの料理人0の意味で）（後書き

感想返信に結構裏話しているんで、覗いてみてください。

それと作者は感想乞食なので、感想、拍手コメしてくれると物凄く喜びます。

今回の場合、具体的には明日の朝までにもう一話書いちゃうくらい喜びます。

裏話。

もちろん、人々が吹っ飛ぶ光景はアルバムに●RECされてます。効果はわかってても味がわからなかったためにドキドキしながら食べてみた神様達ですが、大受けしてわいわい言いながら食べました。後から出た祝福はもちろん、食べた神様の様子に笑った他の神様が投げ渡したものです。ちなみに換金したら結構いい値段ついた。味は口の中で弾ける感じ。それはもう弾ける感じ。でも衝撃の中、一瞬感じる味覚はウマー。

次回BL的表現があります。お気をつけ下さい。
以下ネタバレ

メイドガイの、バフ子がエロメイドな服を着せられて写真取られて

「責任とれ」をそのまんまやります。ネタパクってばかりですみません。でも凄く面白いものは、真似して書くと凄く楽しいです。せめてものお詫びに元ネタは毎回書くようにしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6286y/>

パパン、私は幸せです

2011年11月22日21時52分発行